

国営施設機能保全事業「中勢用水地区」に伴う
林上新田遺跡発掘調査報告

2017（平成29）年12月

三重県埋蔵文化財センター

序

経ヶ峰と錫杖ヶ岳に囲まれた渓谷に源を発し、東流して伊勢湾へ注ぐ安濃川は、流域に豊かな水の恵みをもたらせてきました。古来より、人々はその恵みを利用して生活してきました。

今回報告する林上新田遺跡は、安濃川中流域左岸の段丘上に立地しています。標高は約80mで、石鏃などの石器が表採され、縄文時代の遺跡とされています。

国営施設機能保全事業「中勢用水地区」に伴い、遺跡の現状保存が困難な部分について、緊急発掘調査を実施しました。

調査区は遺跡の北端にあたり、調査面積はごく僅かでしたが、溝1条、土坑5基、柱穴とみられるピットを、陶器、磁器、土師器、瓦などの出土遺物とともに確認しました。

しかし、残念ながら、昔の人々の生活の跡はすでに消滅しました。開発が進み私たちの生活が便利になることは喜ばしいことですが、古くからこの地に生活していた人々が遺した「証し」を保存していくことも大切なことです。消滅してしまう遺跡を記録保存という形で少しでも皆様方に知っていただき、埋蔵文化財保護へのより一層のご理解とご支援を願うばかりです。

末筆となりましたが、調査にあたりましては、多大なるご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成29年12月

三重県埋蔵文化財センター
所長 野原宏司

例　　言

1. 本書は、三重県津市芸濃町林字上新田に所在する林上新田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、三重県教育委員会が農林水産省東海農政局木曽川水系土地改良調査管理事務所長より委託を受けて、平成25・29年度に国営施設機能保全事業「中勢用水地区」に伴って実施した。また、整理・報告書作成業務を平成29年度に実施した。
調査にかかる費用は、農林水産省東海農政局木曽川水系土地改良調査管理事務所の全額負担による。
3. 調査および整理は、次の体制により実施した。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
土木作業	第1・2次調査：株式会社 河合組
4. 現地調査について、第1次調査：田中久生（平成25年度）、第2次調査：長谷川哲也・原田恵理子・小原雄也（平成29年度）が担当した。
5. 本書は長谷川哲也・原田恵理子が執筆・編集した。遺構写真撮影は現地調査担当者が行い、遺物写真撮影は小原雄也が担当した。また、室内整理業務は原田恵理子が行った。
6. 本書で用いた座標値は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海拔高である。
7. 土層図の色調は小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社1967年初版）を用いた。
8. 遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、通番の数字の組合せにより表記する。
SD（溝）、SK（土坑）、P i t（柱穴）
9. 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

I 前 言	1
1 調査に至る経緯	
2 調査の経過	
3 調査区の設定	
4 文化財保護法にかかる諸通知	
II 位置と環境	2
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 基本層序及び遺構・遺物	6
1 基本層序	
2 遺構	
3 出土遺物	
IV まとめ	9

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡周辺地形図	4
第3図 調査区位置図（第1次）	5
第4図 調査区位置図（第2次）	5
第5図 出土遺物実測図	6
第6図 遺構全体図	7
第7図 調査区土層図、SK2土層図、Pit1断面図	8

表目次

第1表 遺構一覧表	9
第2表 遺物観察表	9

写真目次

写真図版扉	11
写真図版1 調査前、調査区東半	12
写真図版2 調査区西端、SK2土層	13
写真図版3 SK4、Pit1	14
写真図版4 SD6、調査区東壁土層	15
写真図版5 出土遺物(外面)、出土遺物(内面)	16

I 前 言

1 調査に至る経緯

安濃ダムは、津市西北部に広がる農地約3,180haへ安定的かつ効率的な用水の供給を目的に、国営中勢用水土地改良事業の水源として2級河川安濃川の上流、芸濃町河内地内に建設された重力式コンクリートダムである。昭和56年10月着工、昭和61年10月完成、試験湛水、ダム検査を経て、平成元年12月から三重県が管理・運用を行っている。しかし、事業完了後、経年に伴う性能低下が生じてきている。そこで、長期に渡り機能を保全するため、平成24年度から同33年度にかけて、対策工事を行うことになった。その一環としてダムに堆積した土砂を搬出する工事がある。搬出先は芸濃町林地区の盛土場であるが、運搬ルート途中には、大型車両が1台しか通過できない狭小部が存在する。このため、工事用道路を造ることとなり、その計画路線上に林上新田遺跡の北端がかかることとなった。

林上新田遺跡は、津市芸濃町林の集落の西方に広がる台地の西端に所在する縄文時代の遺跡である。

当センターは東海農政局木曽川水系土地改良調査管理事務所中勢支所と協議し、現状保存が困難な埋蔵文化財について、事前の発掘調査を実施し、記録保存に努めることとした。

そして、平成26年1月22日に、第1次調査を実施し、溝状の遺構を検出した。

平成29年7月20日から26日にかけて、第2次調査を実施し、ピット・土坑・溝を検出した。遺物は近世の陶磁器類小片が出土したのみで、明確な時期決定には至らなかった。

2 調査の経過

平成29年7月4日に現地での調査手順等についての検討を行い、同11日に現況の写真撮影を行った。

20日に調査区の表土掘削を重機により行い、24日からは人力による遺構検出・掘削を行った。

25日に全景写真撮影を終了し、実測作業に入った。

27日には撤収作業を行って現地作業は終了した。

3 調査区の設定

発掘調査にあたり、調査区に合わせて4m×4mの任意の方眼（グリッド）を設定し、調査の基本単位とした。その後、3m×3mの実測ピンを打ち、それをもとに遺構平面図を作成した。

4 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

- ・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条の1項（県教育長宛）
平成25年12月3日付け25海本第277号
- ・文化財保護法第99条の第1項（県教育長宛）
平成29年7月18日付け教理第140号
- ・遺失物法による文化財発見・届出通知（津警察署長宛）
平成29年8月3日付け教委12-4415号

II 位置と環境

1 地理的環境

津市芸濃町は市の北西部に位置し、伊勢平野の西端にあたる。西は鈴鹿山脈を隔てて伊賀市大山田町に接し、南は経ヶ峰を境にして美里町と、東は安濃町と、北は亀山市と隣接している。

鈴鹿山脈の経ヶ峰と錦杖ヶ岳に囲まれた地域には渓谷が入り込み、安濃川の水源を形成している。安濃川は芸濃町内を流れる最大の河川であり、いくつかの河川を集めながら東流して、伊勢湾へ注ぐ。流路は約30kmである。

林上新田遺跡が所在する芸濃町林は、芸濃町桶原の南東に位置し、安濃川中流左岸の段丘上に立地する。また、地区的北端を中ノ川が東流し、伊勢別街道（県道10号線）がほぼ南北に貫いている。

2 歴史的環境（第1・2図）

林上新田遺跡（1）は、林の集落の西方に所在する。標高は約76~78mである。

当該地域で旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡としては、まず中ノ川左岸の段丘上に所在する北山遺跡（2）と林上垣内遺跡（3）があげられる。北山遺跡ではサヌカイト製の石鏃・剥片の散布が確認され、林上垣内遺跡では縄文土器、石槍がそれぞれ1点出土している。安濃川中流域においては、さらに多くの遺物が確認されている。左岸では、林上新田遺跡でサヌカイト製石鏃・搔器・剥片、チャート剥片が、忍松山遺跡（4）でサヌカイト製石鏃・剥片が表採されている。両河川の流域で表採されている石器のほとんどはサヌカイトで、チャートは少ない状況であることから、縄文時代中期以降、段丘上などに人々が住み着いていたものと推測できる。一方、大石遺跡（5）では発掘調査が行われ、中期末の石圓炉をもつ堅穴住居と、北陸系を含む縄文土器が出土している。右岸では、青木遺跡（6）で中津式の双耳壺を埋置した土坑などが検出されている。隣接する北奥遺跡（7）では、サヌ

カイト製石鏃・石錐・搔器、勾玉が採集されているほか、早期の高山寺式押型文土器が出土している。

弥生時代の安濃川中流域両岸の遺跡は、北から忍田の興遺跡（8）、雲林院の稻井戸遺跡（9）、多門の北奥遺跡・榎田遺跡（10）・多門遺跡（11）、椋本の馬屋町遺跡（12）があげられる。榎田遺跡では発掘調査が行われた。調査面積が97m²と僅かながら、弥生中期の構からほぼ完形で2個体の壺が出土している。北奥遺跡でも発掘調査が行われたが、この時期の出土遺物は僅かであった。

古墳時代の遺跡は前期古墳ではなく、安濃川中流域を中心にいくつかの後期古墳が確認されている。堺ノ上古墳群（13）、東山古墳群（14）、大屋垣内古墳群（15）、宮谷古墳群（16）、松山古墳（17）などで、いずれも径10~20mの円墳である。

一方、北部では荒堀古墳（18）1基のみ確認されている。径12mの円墳で、平坦な台地上に立地する。

このように、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡の分布状況としては疎らであるが、奈良時代以降、遺跡形成は大きく変貌をとげる。先述の大石遺跡では、平安時代末から鎌倉時代の堀を伴う掘立柱建物群が確認されている。また、「僧器」「侍器」「国枝」「包松」などの特徴ある墨書き土器も出土している。北奥遺跡でも、奈良時代から室町時代にかけての集落跡や遺物が確認されている。やや下流の椋本南方遺跡（19）、松山遺跡（20）でも、奈良時代から鎌倉時代に至る広大な集落跡が確認されている。安濃川中流域両岸で、大規模な集落が展開していたことが窺える。

室町時代から戦国時代に入ってくると、この地域でも中世城館がいくつか築かれようになる。大規模なものとしては、安濃郡長野（現：津市美里町北長野）に本拠をおく長野工藤氏の分家雲林院氏の雲林院城跡（21）で、雲林院集落西方の標高約250mの山頂に所在する。現在も堀切や土塁がよく残っている。対岸には雲林院氏与力の忍田城跡（22）、椋本には家老野呂氏の野呂氏館跡（23）、北神山には家老馴越氏の前山城跡（24）が所在し、雲林院氏が

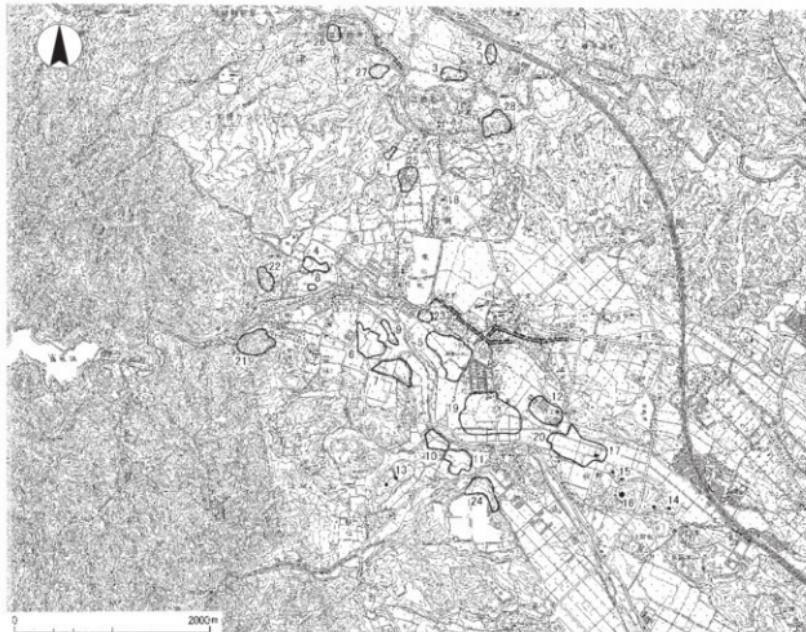
一帯を支配していたことが窺える。とりわけ、野呂氏館跡は発掘調査がなされ、類例の少ない蒸風呂遺構が確認されている。古来、風呂は寺院に「歓堂」「温泉」等の名称で設置されたものであるが、このような施設や習慣が民間へ伝播した一端を垣間見ることができた。

北部には、関氏の一族鹿伏兎氏の林城山城跡（25）、楠原の地侍である山田氏の楠原童子谷城跡（26）と楠原向市場城跡（27）、他に林城屋敷城跡（28）等、小規模ながらいくつかの城館が分布し、群雄割拠の一端を垣間見ることができる。

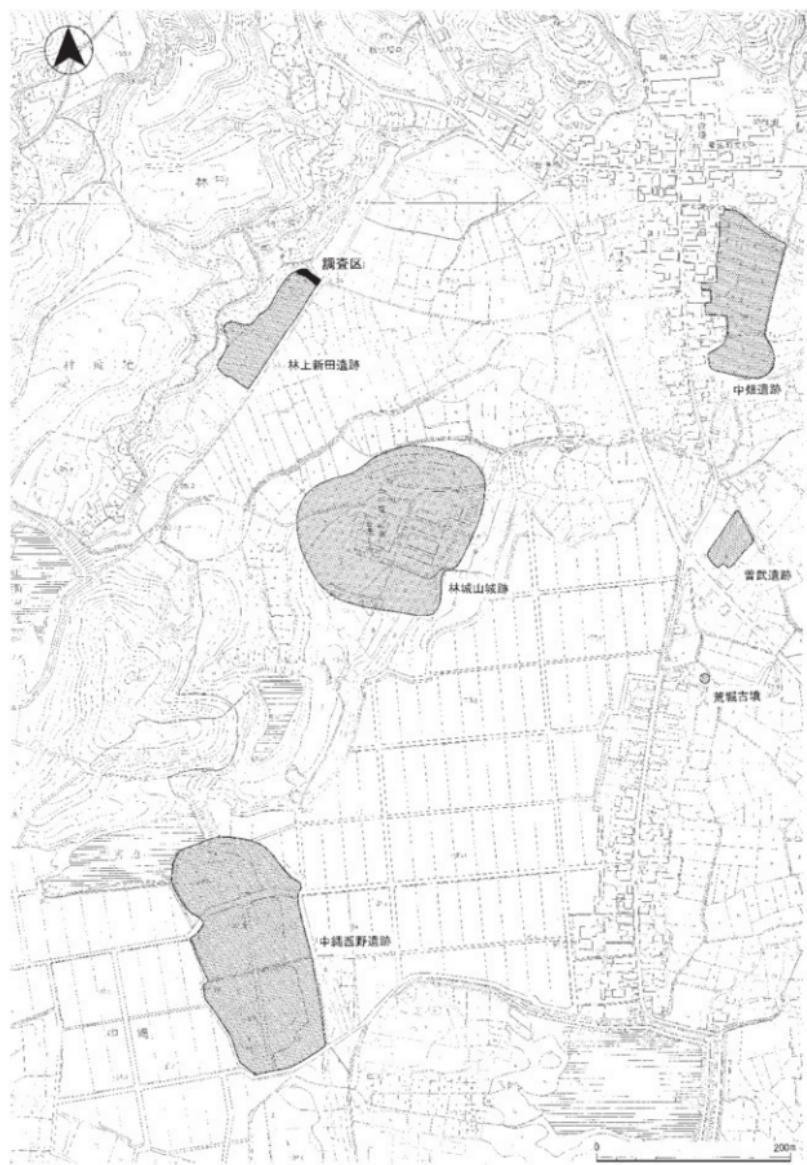
しかし、戦国時代末期になると、織田信長の伊勢侵攻により、これらの城館はやがて廃絶に追い込まれ、近世を迎えると、この地域は津藩及びその分藩である久居藩の支配を受けることとなる。

【参考文献】

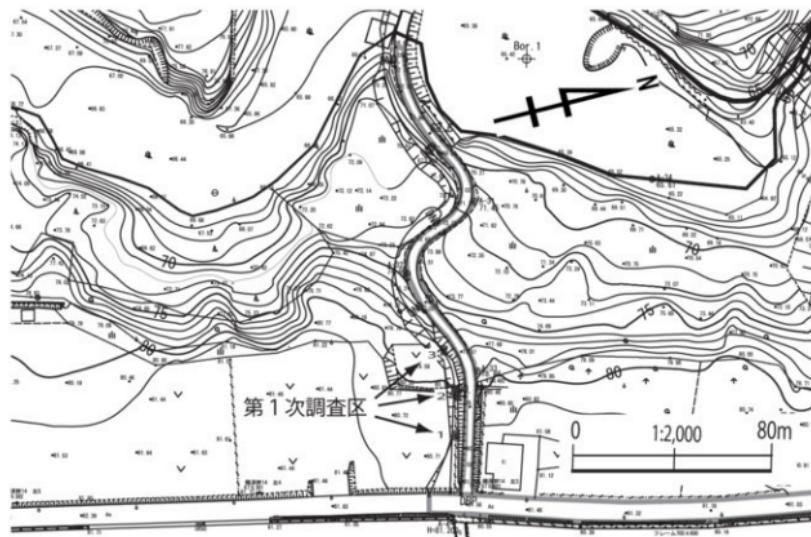
- ・三重県教育委員会『安芸郡吉浜町歴史 西河氏館跡発掘調査報告』(1984年)
- ・三重県教育委員会『吉浜城址』(1986年)
- ・三重県教育委員会『吉浜城跡発掘調査報告』(2005年)
- ・三重県教育委員会『三重の城跡』(1977年)
- ・三重県教育委員会『吉浜城跡』(2006)
- ・三重県教育委員会『吉浜城跡』(2010)



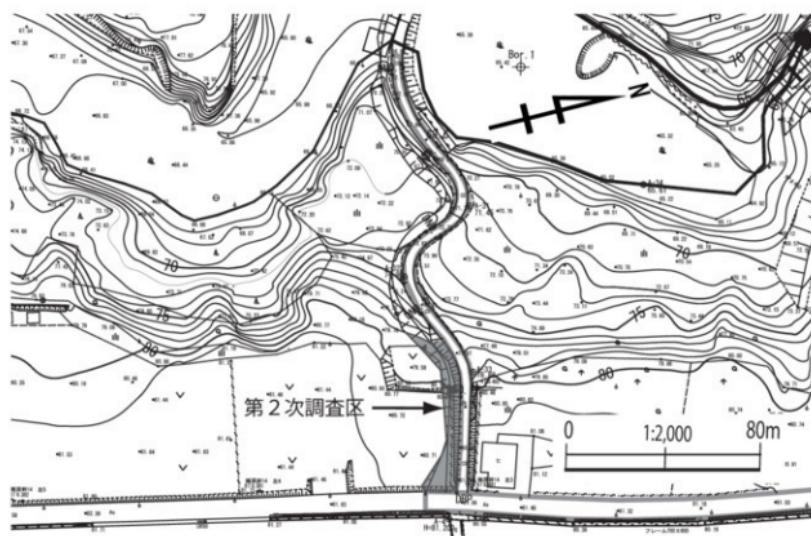
第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)【国土地理院「株本」「龜山」1 : 25,000より作成】



第2図 遺跡周辺地形図（1:5,000）



第3図 調査区位置図（第1次）（1：2,000）



第4図 調査区位置図（第2次）（1：2,000）

III 基本層序及び遺構・遺物

1 基本層序（第7図）

林上新田遺跡は標高76～78mの更新世段丘上に立地している。調査区は東から西へ緩く傾斜している。調査区よりも西側は、南西から北東方向に幅の狭い谷底平野があり、谷底平野に向かって急傾斜となっている。

今回の調査区は林上新田遺跡の北端部にあたり、調査区北側にも小規模の谷が入り込んでいる。

基本層序は、上から耕作土及び表土となる①にぶい黄褐色土、②褐色粘質土、地山となる。地山の土色や土質は場所によって異なり、標高の高い調査区東側は④褐色粘質シルト、標高の低くなる調査区西側は⑤明黄褐色砂質土となる。調査区南壁土層では確認できなかつたが、最も標高の低い調査区北西側の地山層は褐灰色粘質シルト（10YR6/1）であり、⑤層の下層にあたるとみられる。

2 遺構（第6・7図、第1表）

今回の調査で、溝1条、土坑5基、柱穴とみられるPitを確認した。土坑5基を確認した調査区西半は約40～50cm削平されており、遺存度は良くない。また、遺構からの出土遺物は僅少で、いずれの遺構も時期を特定することができなかつた。出土遺物の多くは表土掘削時に確認した。

遺構番号順に形状・特徴等を記載する。

S K 1 a 8地区に位置する。上部は削平され、平面形態は西端部分でしか捉えられず、検出面からの深さは1cmであった。

S K 2 a 7地区に位置する。長さ2.14m以上、幅1.1mである。断面形態は船底状で、検出面からの深さは最深で11cmである。

S K 3 a 7地区、SK 2の南に位置する。0.7×0.56mの梢円形を呈する。SK 1と同様、上部は削平され、深さは1～2cmであった。

S K 4 a 6～b 7地区に位置する。ほぼ方形の土坑で、規模は4.26×2.02mである。主軸はN75°

Wである。断面形態は箱形で、底は平坦である。検出面からの深さは、深い所で16cmであった。当初は擾乱を挟んだ東側に位置するSK 2と同一遺構とも考えたが、断面形態及び底の深さが大きく異なるため、別遺構として捉えた。

S K 5 a 7地区、SK 2の南側で重複する土坑で、SK 2より古い。深さは約6cmで、SK 2より浅い。

S D 6 調査区東端、a～b 11地区に位置する南東から北東方向へ蛇行する溝である。断面はU字形で、検出面からの深さは15cmである。

Pit 1 b 6・7地区、SK 4の南に位置する。規模は0.72×0.56mで北半はSK 1～5と同様削平されている。深さ57cm、標高76.86mで底に達した。底付近で25×12cm程度の根石とみられる縫を確認した。

3 出土遺物（第5図、第2表）

1は瀬戸産陶器の壺体部片とみられ、SK 1から出土した（写真図版5-1）。

2は時期不明の土師器で、SK 4から出土した（写真図版5-2）。3～5は表土掘削時に、6は排水（表土）から出土した。

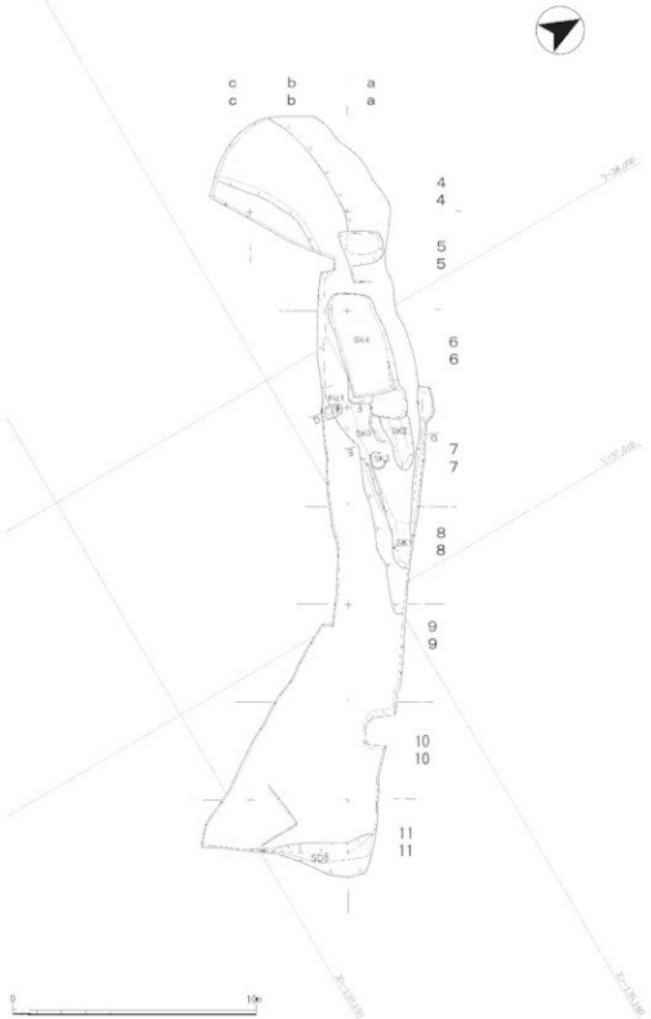
3は肥前産磁器の紅皿である。外面は菊花のような筋が密に入っている。4は瀬戸・美濃産陶器の小杯である。灰釉が施され、文様等は認められない。

5は瓦の周囲を打欠いた円形加工品である。周囲は打欠いたのみで擦った痕跡は認められない。瓦の凹面にあたる部分は若干摩耗している。6は肥前産磁器である。小片であるため、器種は碗か皿が判然としない。染付で内外面共に施文が認められる。

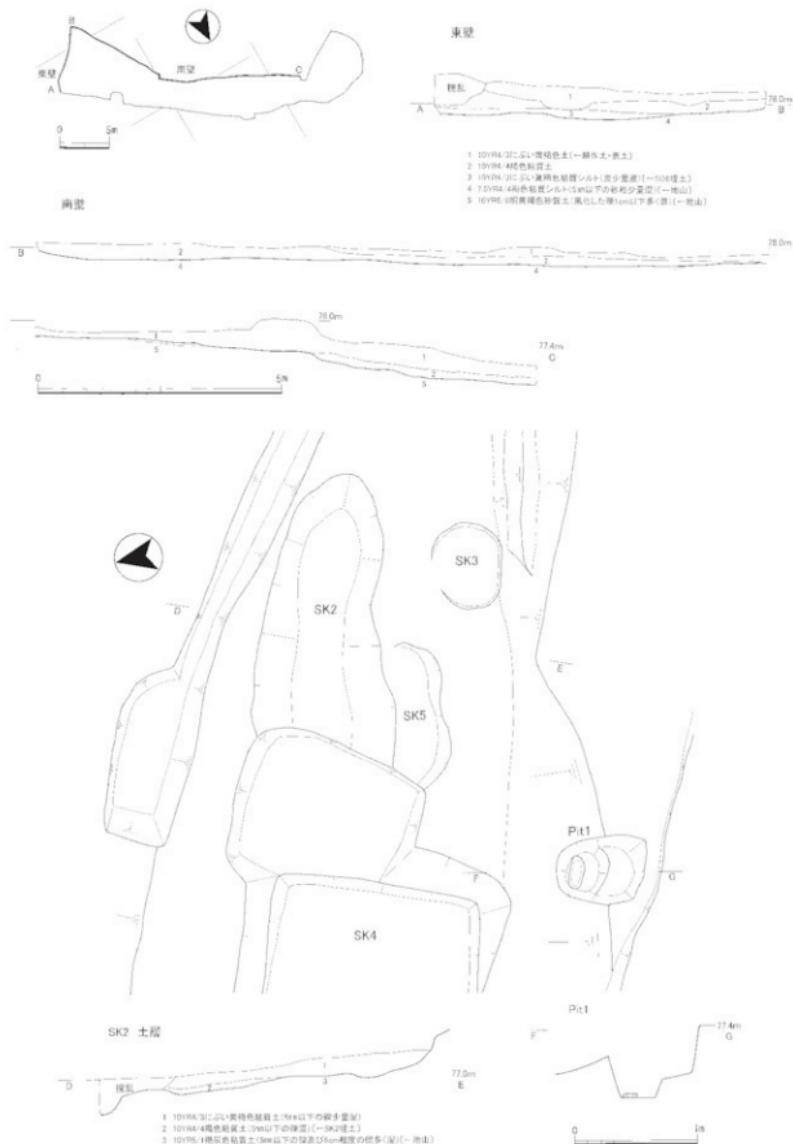
いずれも近世のものである。



第5図 出土遺物実測図（1：4）



第6図 遺構全体図 (1 : 200)



第7図 調査区土層図 (1:100)、SK2土層図 (1:40)、Pit 1断面図 (1:40)

IV まとめ

中ノ川左岸や安濃川中流域両岸の段丘上、丘陵端、小さな開析谷の傍らで、サヌカイト製石鐵や剥片等が表採されており、縄文時代の遺跡が疎らに点在していることについては第II章で述べたとおりである。

しかし、林上新田遺跡付近は、縄文時代以降、後期古墳が1基存在するのみで、弥生時代から平安時代までの状況は不明であり、この地域が歴史的表舞台に登場してくるのは鎌倉時代以降である。

「林」の地名の初見は、建久3年(1192)の伊勢大神宮神領注文に神宮御厨として、また、『神鳳鈔』にも内宮の御厨地として記述されており、鎌倉時代には村として成立していた可能性が窺える。さらに、九条家文書に林西庄・林東庄の地名が見られることから、都の貴族の荘園地にもなっていたことがわかる。そして、東西二つの庄地は林字宮ヶ谷に所在する普門寺を境にして東西に分かれていたとされ、それに従えば林上新田遺跡は林西庄に属することとなる。

近隣には伊勢別街道を挟んで東側約500mに中畠遺

跡と曾部遺跡が所在する。山茶椀・土師器・陶器が疎らに散布し、鎌倉から室町時代の遺跡として考えられている。また、林城山城跡が南東方向150mに所在する。このように林上新田遺跡付近は、濃密ではないものの一定量の遺物の散布が認められ、荘園地であったことも踏まると、中世から近世にかけて人々の営みがあったことは容易に推察できる。

今回の調査区は遺跡の北端部にあたり、南から北へ傾斜している。出土遺物の大半は表土からであり、混入の可能性が高い。また、方形の土坑とその東側で根石の入った柱穴を検出したが、周囲が削平され遺存度は良くなかった。

こうしたことから遺跡の時期や検出構造の性格の特定までには至らなかった。

遺跡の中心はもう少し南側であった可能性が高く、今後様相が明らかになっていくことを期待したい。

【参考文献】
・吉澤昭彦著『吉澤昭彦全集』(1986年)

第1表 遺構一覧表

報告書番号	実測番号 (R-N)	器種等	遺構	法量 (cm)	断土	焼成	色調	残存 (12万箇中)	特記事項
S K 1	a 8		0.2以上	0.3以上	1	77.11	7.5YR4/6褐色土 (地山プロック面)	近世陶器片・近世か	
S K 2	a 7		2.14以上	1.1	9~11	76.78~78.96	10YR4/4褐色粘質土 (径5mm以下の礫混)	出土遺物なし・時期不明 SKより新しい	
S K 3	a 7		0.7	0.56	1~2	77.01~77.07	7.5YR4/3褐色土	出土遺物なし・時期不明	
S K 4	a 6~b 7		4.26	2.02	2~16	76.55~76.65	10YR4/4褐色粘質土 (径5mm以下の礫混)	土師器小片・時期不明	
S K 5	a 7		1.1以上	0.44以上	6	76.95	7.5YR4/2灰褐色粘質土 (径5mm以下の礫多く混)	出土遺物なし・時期不明 SKより古い	
S D 6	a ~ b 11		4.8以上	0.7以上	15	77.70~77.71	10YR4/3灰褐色粘質土 (灰少量混)	出土遺物なし・時期不明	
Pit 1	b 6~7		0.72	0.56	57	76.86	10YR4/6褐色粘質土 (径5mm以下の礫及び灰少量混)	出土遺物なし・時期不明 底付近に根石あり	

第2表 遺物観察表

写 真 図 版

写真図版 1



調査前（南から）



調査区東半（東から）



調査区西端（東から）



S K. 2 土層（西から）

写真図版 3



S K 4 (東から)



P i t 1 (南から)

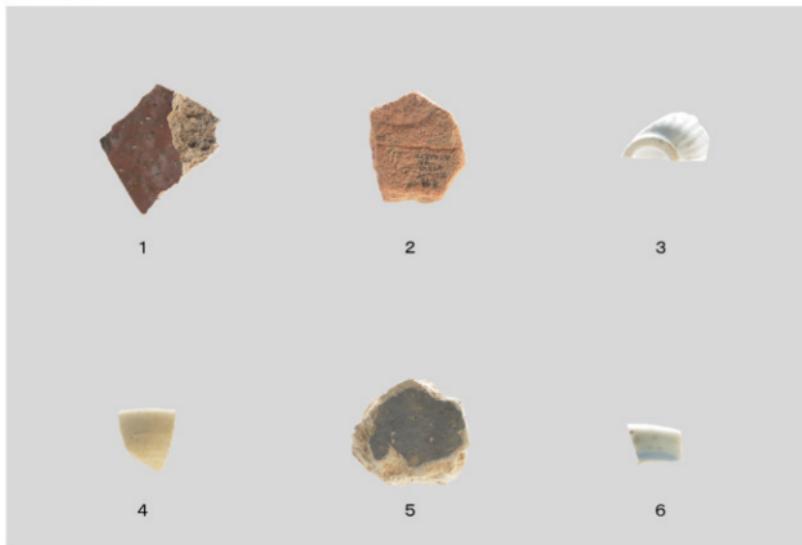


S D 6 (北西から)

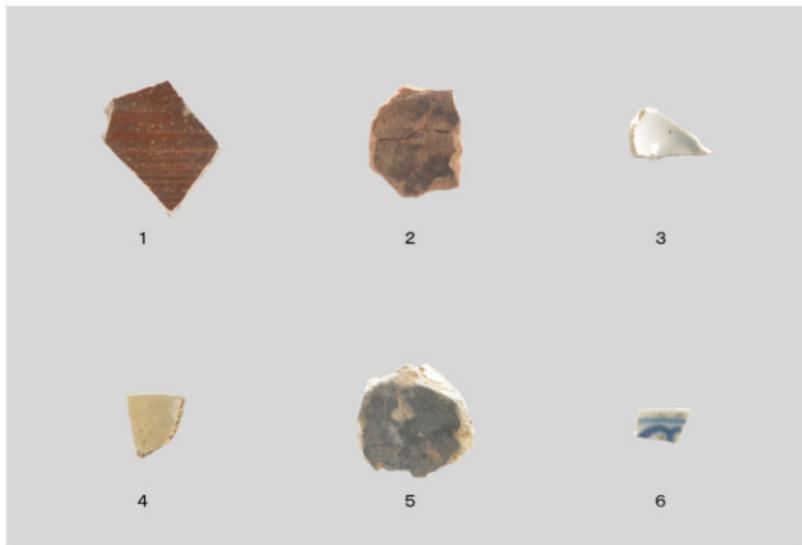


調査区東壁土層（西から）

写真図版 5



出土遺物（外面）



出土遺物（内面）

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告 3 7 4

国営施設機能保全事業「中勢用水地区」に伴う
林上新田遺跡発掘調査報告

2017（平成29）年12月15日
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 共立印刷株式会社
